

留学生との交流における構成的  
グループエンカウターの有用性に関する研究  
—中国人留学生との交流をもとに—<sup>1)</sup>

A Study on the Availability of the Structured Group Encounter for  
Intercommunication between Japanese and Foreign (Chinese) Students

水野邦夫・李 艶・興津真理子・富川 拓・炭谷将史  
・山口隆介・吉川栄子・高橋 宗

Midzuno K., Li Y., Okitsu M., Tomikawa T., Sumiya M., Yamaguchi R., Yoshikawa E., and Takahashi S.

要 約

本研究は、大学の現場における日本人学生と留学生（中国人）との交流に  
関分（1981, 1992）の構成的グループエンカウター（以後S G Eと略記）  
がどのような効果をもたらすかについて検討を行った。心理学を専攻する学  
生を対象にS G Eの演習に関する授業を行い、留学生を交えてのエクササイ  
ズやシェアリングを通して、日本人学生や留学生にどのような心理的効果が  
みられるかを調べるために継時的な質問紙調査を行った。その結果、特に留  
学生において、日本人学生と交流したいと考える傾向が強く、また、交流を  
通して自己をより肯定的に認知していることなどが明らかとなった。これら  
のことから、S G Eは日本人学生と留学生の交流促進に有効であることなど  
が考察された。一方、データの不足や他の要因の影響が統制できていないな  
どの問題点もあり、今後のさらなる検討が求められた。

**Key Words** : 留学生との交流、構成的グループエンカウター、自己認知の変化

はじめに

昭和58（1983）年に文部省（当時）が「留学生受け入れ10万人計画」を策  
定してから、日本へ来る留学生の数は年々増加し、文部科学省（2003）の資

1) 構成的グループエンカウターを行うにあたり、留学生の通訳をいただいた陳璟暉くん、崔美玉さん、  
邢麗娟さん、張 帆くんに心より感謝の意を表します。

料によると、平成15年5月現在の留学生数は10万9,508人と、目標の10万人を超えるに至っている。また、同資料によれば、平成3（1991）年から平成11（1999）年ごろまでは留学生（ただし大学以外も含む）の受け入れが停滞気味であったが、平成12（2000）年以降は、前年比約15～23%の伸びをみせており、平成15年5月1日現在の留学生受入れ主要大学30校の留学生受け入れ数は28,310名にのぼっている。

このように、留学生の受け入れは各大学で積極的に行われている。もちろん、そのことがさまざまな社会問題をもたらし、「安易な受け入れ」などといった批判もなされている（例、浅野, 2004；熊本日日新聞, 2003.08.28；読売新聞, 2003. 11. 17）が、しばらくはこの傾向が続くと考えられる。

しかし、言葉の問題や文化の違いなどから、日本人学生と留学生が交流するのは必ずしも容易ではないようである。各大学では、国際交流センターなどを設置し、両者の交流を促進させようとさまざまな試みを行っているが、言語によるコミュニケーションが十分にできなかつたり、日々の生活サイクルが異なったり（例えば、留学生は学費を稼がなければならないので、授業が終わるとすぐにアルバイトへ出かけるため、クラブ活動などを通じた交流が行われにくい（高松, 2002）、など）や、あるいは文化的な違い（例えば、日本人特有の「ウチ」と「ソト」という感覚（中根, 1977）などは、留学生には理解しがたいであろう）などから、通常場面での交流はなかなか難しいのが現状であろう。しかし、国際交流の促進という観点から考えた場合、この現状に甘んじるのではなく、通常場面での交流や人間関係づくりを促進する手だてを模索する必要があるだろう。

ところで、人間関係づくりは今や現代社会の重要課題のひとつとなりつつある。現代社会は、ますます快適で便利になり、価値観も多様になったが、その反面、人間関係が希薄化し、若年層を中心に健全な人間関係が構築できない人が増えている。そこで、健全な人間関係づくりを促進するための技法が求められ、また現に開発もされている。たとえば、人間関係形成能力を社会的スキルの問題として捉え、社会的スキルを高めるための訓練技法である

ソーシャルスキルトレーニング (Social Skill Training) では、学習モデルやステップ、その他さまざまなプログラムが開発されており、その効果が報告されている (津村 (1994) などを参照)。また、坂野公信が創始したグループワークトレーニング (GWT) は、本来はレクリエーションリーダーの養成のために開発されたが、その後、各種団体の指導者養成講座のひとつとして、また病院や企業における新入社員研修などでも用いられるようになり (坂野, 1988)、さらには小・中学校をはじめとした学校現場における人間関係づくりの手法としても活用されている (坂野監修, 横浜市学校GWT研究会, 1989, 1994)。

このように、さまざまな人間関係づくりの技法が生み出されているが、國分 (1981) が提唱した「構成的グループエンカウター (Structured Group Encounter、以後S G Eと記す)」もそのひとつである。S G Eは従来のグループエンカウター (これを非構成的グループエンカウター、ベーシックグループエンカウターなどという) に改善を加え、エンカウターの中に半強制的にエクササイズを課したものである。國分 (1992) はS G Eのメリットとして、1) 所定の時間内に収められること、2) 沈黙だけが続いてエンカウターが終わるようなことがないこと、3) 枠組みの中で行い、適宜リーダーが介入をすることにより、メンバーの心的外傷を予防したり、グループの荒れを抑えることができたりすること、などを挙げている。S G Eは初等・中等教育の学級運営における人間関係づくりの手法としてさまざまな成果を上げているが、もちろん大学生や成人の人間関係づくりにも同様の効果が期待される。

そこで、日本人学生と留学生の交流を深め、健全な人間関係づくりを促進するのに、S G Eが活用できるのではないかと考えられる。佐々木 (2000) は留学生の援助にS G Eが活用できる可能性を論じており、とくに仲間づくり、文化への気づき、異文化間ソーシャル・スキルの理解と習得に有用であることを提言している。また、留学生との交流には、外見、言葉、習慣の違いが障壁となりやすいが、「構成」という一定の枠組みを与えることで、各々

の行動の変化を促し、自然に障壁を越えさせ、両者にとって「新しい文化」をつくり出す、といった効果をもたらすとしている。もちろん、言葉の問題があるので、日本人だけでのSGEと同じようにできないところはあるだろうが、SGEの中には複雑な言語的コミュニケーションを要しないエクササイズもあり、たとえ言葉の問題があっても充分に対応が可能である。また、言語的コミュニケーションを要するエクササイズも、内容を理解しようと努めるために、却って傾聴などの態度を促進し、関係を深めていくのに適しているとも考えられる。さらに、日本語と留学生の母国語の双方を理解する者を補助として付ければ、言語的なエクササイズも最終的には問題なくできるであろう。

このように、留学生との交流にSGEは効果的であることが期待されるが、実際に留学生と日本人学生の交流にSGEを用いた実証的研究はほとんどないようである。そこで本研究では、SGEを実践する授業の中で、日本人学生と留学生（今回は中国人留学生）がどのように感じたか、また相互交流や人間関係づくりにSGEがどのような役割を果たしたと考えられるかについて調べ、留学生との交流におけるSGEの効果を検討することを目的とした。

## 方 法

**被調査者** 聖泉大学でSGEを中心に行う演習を受講した学生を調査対象とした。

**エクササイズ** 被調査者は3グループに分けられ、4週（ただし週1回ずつの90分授業）で1セットのSGEのエクササイズを取り入れた授業を受けた。4週の授業を終えると、次の4週は別の担当教員のもとで、同様にエクササイズを中心とした授業を受けた。さらに次の4週は、また別の担当教員のもとで同様に授業を受けた。

なお、どのグループもはじめの4週は、インタビューや相方紹介などを通して他者とコミュニケーションをとるエクササイズを、次の4週では、グループワークを中心としたエクササイズを、最後の4週では、自分の内面を意

識させることを目的としたエクササイズをそれぞれ行った。

授業は日本語で行ったが、中国人留学生が日本語を理解できない場合を考慮して、各グループには日本語が堪能な中国人学生を1名から2名配置し、理解できない場合には適宜通訳するように配慮した。また、エクササイズをする際にはさらに小グループに分かれたが、留学生どうしで固まってしまうことのないように、グループ分けを配慮し、多くの日本人学生とエクササイズができるようにした。

**質問紙** SGEを受けて感じたこと、また自己に対する認知の程度を調べるために質問紙を作成した。質問紙は2つの部門からなり、1つはSGEを受けて感じたことなどをたずねる問題（計12項目、表1参照）、もう1つは林（1976, 1979ほか）の特性形容詞尺度（計20項目）の各項目について、自分自身がどれくらいあてはまるかを回答させるものであった。なお、回答は、いずれの項目についても、4週にわたる授業を受けてどれくらいあてはまるかを5段階で評定できるようにした。また、中国人留学生用として、同じ質問紙を中国語に翻訳したものを作成した。

表1 SGEで感じたことに関する質問項目

- 
1. あなたは、メンバーの人たちに自分の気持ちを素直に表現することができたと思いますか？
  2. この授業以外で留学生と話す機会が増えましたか？
  3. 他のメンバーの意見を聞いて、「自分もそう思う」と納得したことはありましたか？
  4. グループやペアで話をするとき緊張しましたか？
  5. グループやペアで話をしている、他人の意見に違和感を感じることはありましたか？
  6. 他のメンバーたちは自分の気持ちを素直に表現していたと思いますか？
  7. メンバーの人たちに親しみを感じましたか？
  8. あなたは、留学生のことをもっと知りたいと思うようになりましたか？
  9. 自分のことを話すときに、恥ずかしさを感じたりしましたか？
  10. これまでの授業を通じて、自分の新たな一面を発見することができたと思いますか？
  11. あなたは授業に楽しく参加できたと思いますか？
  12. この授業がきっかけで新しい友達ことができましたか？
- 

**質問紙調査の実施** 被調査者には、3回にわたり、上記質問紙を配付し、回答を求めた。調査は4週の授業が終わった翌週（すなわち、次の担当教員へ移動した第1週目）の授業開始時に行った（3回目の調査については、翌週

に全体ガイダンスの時間を設けたので、その開始時に行った)。

回答に要した時間は5分から10分程度であり、回答が終わった段階で回収した。

## 結 果

分析に際し、回答内容が真摯でないと思われる者(具体的には、すべての問について、ほとんど同じ値に印をつけているもの)のデータは除外した。また、各授業への出欠状況をもとに、出席2点、遅刻・早退1点、欠席0点まで出席数を算出し、6点(すなわち、最低でも2回はフルに出席し、残り2回は遅刻または早退の場合、あるいは3回はフルに出席し、1回だけ休んだ場合)に満たない者のデータを除外した。よって、最終的には51名(日本人学生41名、中国人留学生10名)のデータを分析に用いた。なお、以後の分析では、回答に欠損値のあるデータを当該分析の都度に除外しているため、分析によって、対象人数は若干異なっている。

SGE受講の印象について 各4週ごとにSGEを受けてみて感じたことなどについてたずねた項目のうち、とくに自身の感想を尋ねた問(表1の問1、3、4、5、7、9、10、11)について、各分析対象者の3回分のデータをもとに因子分析(主成分解、Promax回転)を行った。なお、因子数は解釈可能性と固有値の推移を考慮して3因子指定とした。因子パターン及び因子間相関を表2に示す。

第1因子は、問11、7、10、1が高く負荷したが、その内容はSGEを通して自己表現や自己発見などがうまくできたかどうかを尋ねるものであり、「SGEへの効力感(以後、効力感と記す)」と解釈した。第2因子は、問4、9が高く負荷し、SGEを行う上での緊張感や恥ずかしさに関するものなので、「SGEを行う上での緊張感(以後、緊張感と記す)」と解釈した。第3因子は、問5のみが高く負荷したが、因子の性質を解釈するのが困難であったため、解釈は行わなかった。

そこで、各因子について、因子負荷量.60以上のものを選び(第1因子:問1、

表2 SGEの受講印象に関する問の回転後因子パターン

	I	II	III	$h^2$
11 あなたは授業に楽しく参加できたと思いますか？	<b>.814</b>	-.144	-.051	.730
7 メンバーの人たちに親しみを感じましたか？	<b>.771</b>	.034	.025	.587
10 これまでの授業を通じて、自分の新たな一面を発見することができたと思いますか？	<b>.733</b>	.168	-.166	.557
1 あなたは、メンバーの人たちに自分の気持ちを素直に表現することができたと思いますか？	<b>.709</b>	-.180	.031	.572
3 他のメンバーの意見を聞いて、「自分もそう思う」と納得したことはありましたか？	.585	.101	.545	.617
4 グループやペアで話をするとき緊張しましたか？	.070	<b>.914</b>	-.030	.812
9 自分のことを話すときに、恥ずかしさを感じたりしましたか？	-.109	<b>.861</b>	.037	.797
5 グループやペアで話をしている、他人の意見に違和感を感じることはありましたか？	-.181	-.032	<b>.891</b>	.832
	寄 与	2.697	1.682	1.124
	因子間相関	I	II	
		II	-.158	
		III	-.051	.180

註：ゴシック太字は、因子負荷量が.60以上であることを表す。

7、10、11。第2因子：問4、9)、それぞれ効力感尺度、緊張感尺度とし、各回の回答でのそれらの合計点をその因子を表す指標とした。なお、各回の効力感尺度、緊張感尺度の内的整合性を調べるために、Cronbachの $\alpha$ 係数を調べたところ、効力感尺度では、1回目：.661、2回目：.808、3回目：.680、緊張感尺度では、1回目：.687、2回目：.712、3回目：.711であった。自己認知について 各回の自己認知に関する回答についても、先と同様の方法で因子分析を行った（手法も先と同様。因子数決定も先と同様にして、3因子を得た）。なお、第1回目の調査において翻訳上の不備があった項目（自信のない-自信のある）および項目の語の対が必ずしも反対の意味をなさないと思われる項目（恥知らずの-恥ずかしがりの）を除外した18項目について分析を行った。因子パターン及び因子間相関を表3に示す。

第1因子は問16や問4などの項目が高く負荷しており、「親しみやすさ」の因子と解釈した。第2因子は、問15、問8などが高く負荷し、「リーダー

表3 SGEの受講印象に関する問の回転後因子パターン

	I	II	III	$h^2$
16 親しみやすい - 親しみにくい	<b>.840</b>	-.049	-.229	.742
4 人なつっこい - 近づきがたい	<b>.770</b>	-.037	-.284	.675
6 心のひろい - 心のせまい	<b>.756</b>	.092	-.003	.660
3 なまいきでない - なまいきな	<b>.665</b>	-.016	.232	.461
19 気長な - 短気な	<b>.624</b>	-.086	.280	.393
14 感じのわるい - 感じのよい	<b>-.747</b>	-.096	.009	.651
5 にくらしい - かわいらしい	<b>-.761</b>	.013	-.181	.580
20 不親切な - 親切な	<b>-.778</b>	-.069	-.126	.669
2 人のわるい - 人のよい	<b>-.784</b>	.021	-.055	.593
15 分別のある - 無分別な	-.259	<b>.898</b>	.233	.618
8 責任感のある - 責任感のない	.045	<b>.797</b>	.066	.668
13 堂々とした - 卑屈な	.206	.693	-.050	.699
1 積極的な - 消極的な	.192	.640	-.258	.704
17 無気力な - 意欲的な	-.404	-.474	.122	.644
12 沈んだ - うきうきした	.057	-.069	<b>.763</b>	.593
7 非社交的な - 社交的な	-.102	-.321	<b>.623</b>	.600
11 重々しい - 軽薄な	.475	.149	.564	.582
9 そそっかしい - 慎重な	-.108	-.294	<b>-.619</b>	.460
寄 与	5.840	3.049	2.101	
因子間相関	I	II		
	II	.572		
	III	-.079	-.130	

註：ゴシック太字は、因子負荷量が.60以上であることを表す。

シップ特性」の因子と解釈した。第3因子は、問12、問7などが高く負荷し、「活動性」の因子と解釈した。

これらについても、先と同様（ただし、因子負荷量は絶対値が.60以上）の基準・方法で、各因子を表す指標を求めた（第1因子：問16、4、6、3、19、5、14、20、2。第2因子：問15、8、13、1。第3因子：問12、7、9）。

このとき、第1因子については、因子負荷量が負の項目を逆転項目として、6からその値を減じた値を加算した。また、第3因子については、正に負荷している項目を逆転項目として加算した。なお、各回の各尺度の内的整合性を調べるために、Cronbachの $\alpha$ 係数を求めたところ、親しみやすさでは、1回目：.884、2回目：.917、3回目：.933、リーダーシップ特性では、1



回目：.781、2回目：.835、3回目：.821、活動性では、1回目：.592、2回目：.523、3回目：.502であった。

**効力感・緊張感の変化** SGEを行っての効力感や緊張感について、日本人学生、中国人留学生それぞれについて各回での変化などを調べた。各回の平均値を図1および図2に示す。

それぞれについて、2（日本人・留学生）×3（各回）の分散分析を行ったところ、効力感については日本人・留学生の主効果および各回の主効果が有意であった（各、 $F(1, 46)=6.29, p<.05$ ； $F(2, 92)=4.81, p<.05$ ）。図1からわかるように、留学生の方が効力感が高く、また各回の主効果について多重比較（TukeyのHSD検定。以後同様）を行ったところ、3回目の値が1、2回

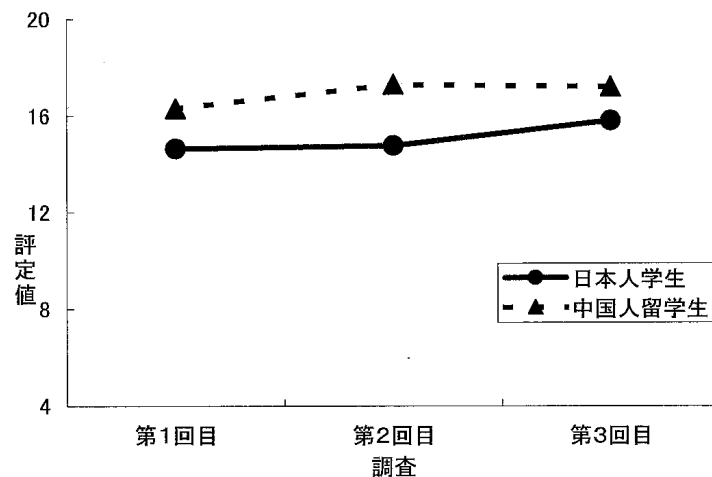


図1 SGEに対する効力感について

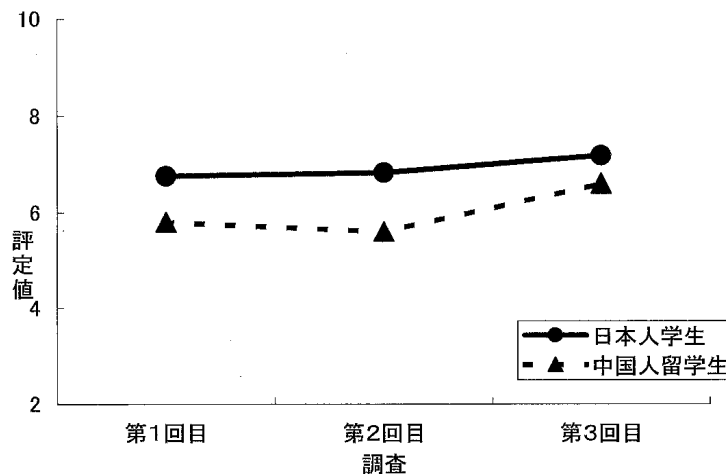


図2 SGEに対する緊張感について

目よりも有意に高かった。

緊張感については、回数の主効果に有意な傾向がみられた ( $F(2, 96)=3.04$ ,  $p<.10$ ) が、多重比較の結果有意な差は認められなかった。

話す機会などに関する問について 質問項目の問2 (この授業以外で留学生〔留学生には日本人学生〕と話す機会が増えましたか?) および問8 (あなたは、留学生〔同上〕のことをもっと知りたいと思うようになりましたか?) についても、同様に変化を調べ (図3および図4参照)、分散分析を行った。その結果、問2については (日本人・留学生)  $\times$  (各回) の交互作用が有意であった ( $F(2, 96)=3.53$ ,  $p<.05$ ) が、単純主効果の検定の結果、有意な差は認められなかった。

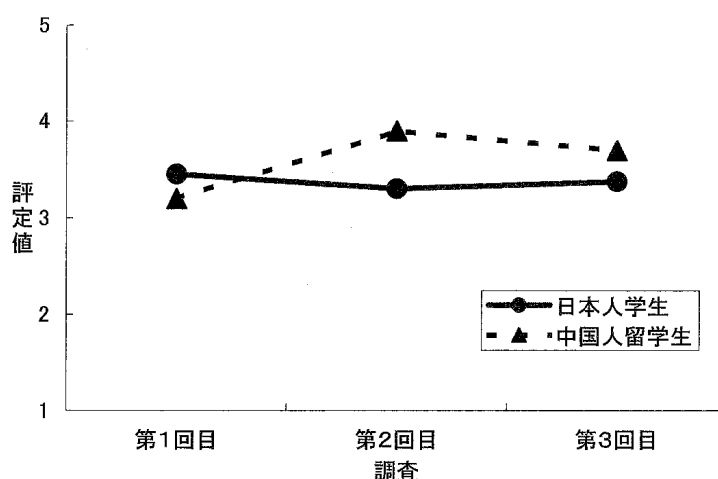


図3 留学生 (または日本人学生) と話す機会が増えたかについて

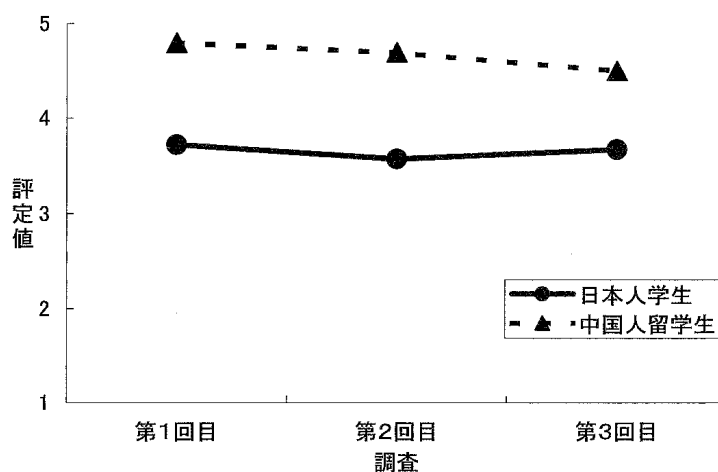


図4 留学生 (または日本人学生) のことをもっと知りたいと思うかについて

また問8については、日本人・留学生の主効果が有意であり ( $F(1, 48)=12.42, p<.001$ )、留学生の方が日本人学生と話す機会が増えたと感じているという結果になっている。

自己認知の変化について 自己認知の変化についても同様に調べ (図5～図7参照)、分散分析を行った。その結果、まず「親しみやすさ」については、日本人・留学生の主効果、各回の主効果、(日本人・留学生) × (各回) の交互作用が有意であり (各、 $F(1, 47)=20.89, p<.0001$ ;  $F(2, 94)=13.04, p<.0001$ ;  $F(2, 94)=4.11, p<.05$ )、各回の主効果では多重比較の結果、1回目と3回目の間に有意な差が認められた。また、交互作用については、単純主効果の検定の結果、いずれの回の親しみやすさにおいても留学生の方が有意に高かったが、日本人・留学生それぞれにおいて各回の間には有意な差は認められなかった。

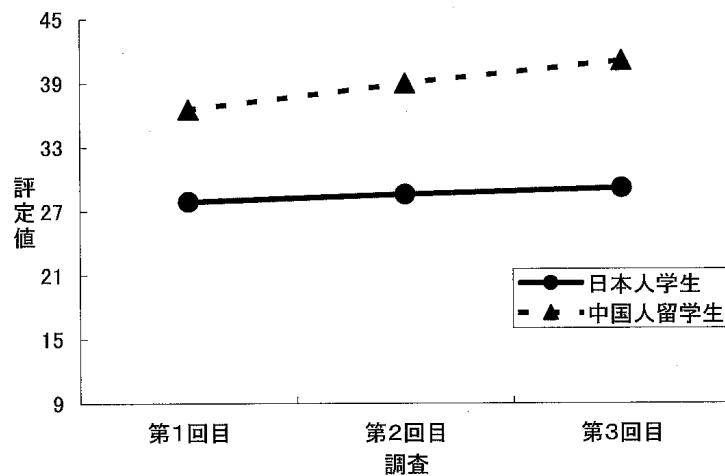


図5 「親しみやすさ」の自己認知について

次に「リーダーシップ特性」についても、日本人・留学生の主効果、各回の主効果、(日本人・留学生) × (各回) の交互作用が有意であり (各、 $F(1, 48)=32.29, p<.0001$ ;  $F(2, 96)=7.44, p<.01$ ;  $F(2, 96)=3.28, p<.05$ )、各回の主効果では多重比較の結果、1回目と3回目の間に有意な差が認められた。また、交互作用については、単純主効果の検定の結果、いずれの回のリーダーシップ特性においても留学生の方が有意に高かったが、日本人・留学生それぞれにおいて各回の間には有意な差は認められなかった。

最後に「活動性」については、日本人・留学生の主効果が有意であり ( $F(1, 48)=12.13, p<.01$ )、これについては日本人学生の方が値が高かった。

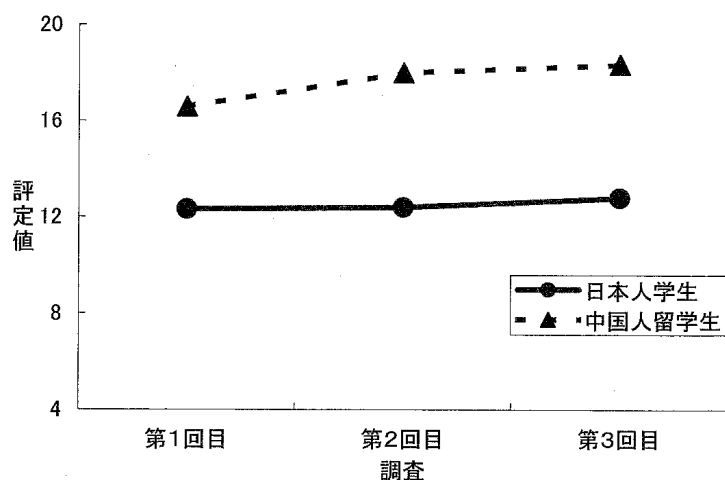


図6 「リーダーシップ特性」の自己認知について

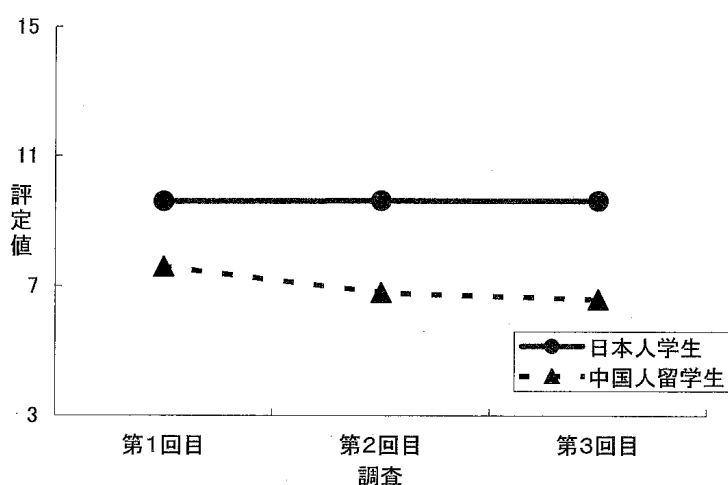


図7 「活動性」の自己認知について

### 考 察

全般的に、回を重ねるごとにSGEに対する効力感が上昇していることが示された。このことは、受講生はSGEに慣れ、そこで得られたものを積極的に評価しようとしていることの流れであると考えられる。一方、緊張感については、多重比較の結果は有意ではなかったものの、回の主効果が有意であったが、これは最後の3巡目のエクササイズが、自己の内面を意識させる

ものであったために、ためらいや緊張感が生じたためであると考えられ、S G Eの効果が減退したというわけではないであろう。

S G Eを通じての日本人、中国人留学生の交流については、中国人留学生の方がより交流したい気持ちが高いという結果になっている。「あなたは、留学生（日本人学生）のことをもっと知りたいと思うようになりましたか？」という問については、日本人・留学生の主効果が有意であり、図4からも一貫して留学生の方がその意識が高いのがわかる。この結果だけからは、S G Eによって留学生のそのような意識が高まったとは言えないが、「この授業以外で留学生（日本人学生）と話をする機会が増えましたか？」については、単純主効果が有意ではなかったものの、日本人・留学生×回数の交互作用が有意であり、図3を見るかぎりでは、留学生は2回目以降、話す機会が増えたと感じているのが窺える。もちろん、この変化もS G Eの効果によるものと断定できないが、留学生にとっては、S G Eが日本人学生との交流に役立った部分があると考えてよいであろう。

次に自己認知の変化をみると、まず、「親しみやすさ」と「リーダーシップ特性」については各回の主効果が有意であったが、図5、図6をみると、この変化はむしろ留学生においてよく上昇しているのがわかる。これらのイメージはどちらかといえば肯定的な自己イメージを表しているといえる。それが、特に留学生において高まっていることは、S G Eやその他の機会を通じて、日本人や日本の生活に慣れ、精神的にも安定感や余裕ができたために、自己を肯定的に受け止めることができたことを示しているのかもしれない。いずれにせよ、S G Eを通じての日本人学生との交流は、留学生にとってはプラスに寄与していると考えてよいであろう。

ところで、「親しみやすさ」と「リーダーシップ特性」は、日本人・留学生の主効果が有意であり、図5、図6からもわかるように、そもそも留学生の方が肯定的な自己イメージを持つ傾向にあることがわかる。これについては、中国人の方が日本人よりも自己や自己の成果を積極的に評価する傾向がある（花澤, 2002；ルー, 1998；園田, 1991）ことが影響している可能性が考

えられる。それゆえ、中国人留学生のみに自己認知の肯定的変化がみられたことは、S G Eの効果以外に、留学生の国民性による部分も大きいのではないかと考えられる。

なお、「活動性」については日本人学生の方が有意に高かったが、他の2つの結果から考えると、日本人の方が低くなることが予測される。しかし、この尺度の $\alpha$ 係数が概して低いことから、むしろ尺度構成上の問題があったと考えられる。

一方、日本人学生については、S G Eによる留学生との交流について、明確な効果は見出せなかった。図3にあるように、留学生と会話をする機会が増えたという認知は、留学生のそれと比べて決して少ないわけではない。また、留学生のことをもっと知りたくなったという意識も、留学生のそれを下回るものの(図4)、各回とも平均は中間点(3.000)を上回っており(1回目: 3.725、2回目: 3.575、3回目: 3.675)、全体的に見て、留学生への関心は決して小さくはないといえよう。しかし、S G Eは週に1回の授業において行われるだけであり、それ以外は留学生と接する時間は少ない。また、調査をした大学は日本人学生が圧倒的に多く、どうしても日本人どうしで接する機会の方が多くなるであろう。そのようなことから、今回の結果は、日本人学生には、対留学生交流にS G Eの効果が見られなかったというよりは、一定の効果を上げているものの、他の要因との関係から、効果が限界に達していると考えた方が適当であろう。

最後に、分析に際し、特に中国人留学生のデータが少なかったが、今後はさらにデータを収集し、また他の要因との関連も考慮しながら分析を進めていく必要がある。

#### 引用文献

浅野慎一 2004 中国人留学生・就学生の実態と受け入れ政策の転換 労働法律旬報, 1576, 1-12.

花澤聖子 2002 中国人と気分よくつきあう方法 講談社

- 林 文俊 1976 対人認知構造における個人差の測定 (I) —認知的複雑性の測度についての予備的検討 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **23**, 27-38.
- 林 文俊 1979 対人認知構造における個人差の測定 (IV) —INDSCALモデルによる多次元解析的アプローチ 心理学研究,**50**, 211-218.
- 國分康孝 1981 エンカウター 誠信書房
- 國分康孝 1992 構成的グループエンカウター 誠信書房
- 熊本日日新聞 2003.08.28朝刊 社説 外国人留学生 受け入れ体制充実が第一
- ルー・ウェイ 1998 中国人の秘密 ヤック企画
- 文部科学省 2003 留学生受入れの概況 (平成15年版) 文部科学省報道発表  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/11/03111102.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/11/03111102.htm) 2004年9月30日情報取得)
- 中根千枝 1977 タテ社会の人間関係—単一社会の理論 講談社現代新書
- 坂野公信 1988 リーダーのGWT 遊戯社
- 坂野公信 (監修) 横浜市学校GWT研究会 1989 学校グループワーク・トレーニング 遊戯社
- 坂野公信 (監修) 横浜市学校GWT研究会 1994 協力すれば何かが変わる—続・学校グループワーク・トレーニング— 遊戯社
- 佐々木ひとみ 2000 留学生援助に活用できる構成的グループ・エンカウター 國分康孝 (編) 続 構成的グループ・エンカウター 誠信書房, Pp.320-322.
- 園田茂人 1991 「関係主義」社会としての中国 野村浩一・高橋 満・辻康吾 (編) もっと知りたい中国II 社会・文化篇 弘文堂
- 高松 里 2002.08.06 留学生と日本人学生は友だちになれるか? (その1) 留学交流マガジン, **4**.  
(<http://members.jcom.home.ne.jp/annexisc/No4.html> 2004年10月15日情

報取得)

津村俊充 1994 社会的スキルの訓練 菊池章夫・堀毛一也(編著) 社会的スキルの心理学 川島書店 Pp.219-241.

読売新聞 2003. 11. 17朝刊 社説 [留学生10万人]「安易な受け入れは見直す時だ」